

平成二十一年八月九月

各章の要点

へプロローグ

・ 多くの文學者、さらにはその文學概念に對して、大掃除にも似た徹底した啓蒙の必要がある。

へ一章

・ 大正の教養主義の風靡以來、近代日本の知識階級は「藝術至上主義」の陥穽におちいつてゐる。その多くの愚かしい錯誤ぶりも、比喩をもつて明らかなる。

・ 電車の比喩、飛行機の比喩を用ゐて、

文明の利器の利用法の常識を説き、さらには文明・未開の別を問はず、いかなる知識も技術もその文藝が現實へつた場合は不用であり、意味が無いにもかかはらず、知識・技術といふだけで崇拜してしまふ〇〇至上主義の滑稽を説く。

一章の結論

・ 藝術至上主義者たる汚名返上のためは、文學の萬能性に対する信仰を抛棄すべし。

一般社会人を啓蒙せんとする。啓蒙家諸氏の無智の壯観。今では啓蒙時期を脱し得ぬ現代日本又啓蒙の必要、忝かある。

知識階級的な無智かより多量に現代を毒してゐる。

小説はいかに書くべきかといふの人生哲學を示唆するもの。作家はそれゆゑ、高量である。

小説を愛読し鑑賞するためには自らそれを書くことは不可能

← 日本的文學概念

藝術家小説
和小説

電車の效用として、今日の時代的状況から、住宅としての利用があげられる。電車の屋根と窓と床を接して、わたためである。

文學が、絵画と同じ様に、山川草木、人や人間を盛り込めると同時に、いかんせんべきかという倫理的當否や政治的・社會的現實の認識を表現し得るとしても、それは、そのまゝならん實生活の用には供し得ない。

電車に屋根があったかごとく、電車の住宅ではあり得ず、描かれた餅は食用にはならぬと同様に、

にもかかはらず、倫理的・社會的の利用法が、むしろ文學の本道として通用しはじめたかに見えて、



二つの理由がある

① 文學の本質にかかはるもの

② 近代日本のみの特殊事情



日本の文學は

實感をも過度に重要視



ことばの二重性による詐術に
みづかひがある

歌道・花道・○○派・○○流
藝術家と稱する人は存在せず

→
日本の傳統的藝術概念
和歌・俳句・絵画・音楽の
實生活との密着

自然の美に詠嘆し、それを
字面しようとする文學概念
→ 近代的日本の傳統的な
美意識

① 文學はことばの藝術である

主材料としてのことば

現實生活における日常用語

この二重性こそ文學のみの
巧みである 特殊事情

② 十九世紀ヨーロッパ文學概念の
誤った移入

人生いかんせんべきかのみ
倫理的當否のみを
リアリズムに見てとらん

・ことばの二重性か或は別の種と云って
ゐるが、これは不幸とのみは言へるい
これか、他の藝術ジャンルに対する
文藝者の優位性を證明してゐる
ことを見逃してはゐるらしい

・文學においては、ことばという素材からの
抵抗は無きに等しいか、現実世界
からの抵抗という重荷を負つて
ゐる

・絵画や彫刻は、あらかじめ美の概念を
持つて制作に臨めるが、文藝者は、
創作過程を通じて、美を続ける
ことによつて、その意思の先端が
わづかんに美にふれるのみだ

・文藝者は、と現実の追求のほつて
美を志向するもの

・現実の重荷に堪へる美しさを
よつて、藝術性を保持しよう

・現実的機能と有し、現実の
論議を一步も出られぬにもかはらず
「美を志向する」といふことと
優位性があるのみ

第二章

・明治十年代の状況

政治小説 隆盛
戯作文学 隆盛

「小説神髓」により規定される



↓
文藝者青年のめくか

・誠實な生活を作家たるに
ふさわしい資格と云へてしまふ
他とジャンルと同様
技術と才能こそが資格たる

・作品の現実とは現実の組織せ
るものというにはなく、組織せ
る美しさというに勝つてゐる

←
作者の理想心と現実との
格闘に美の火花が散る
現実の重荷を切り捨て
理想の勝利を得たとしても
そこに美は隠れてゐる

←
そもそも美とは何か

近代ヨーロッパのリアリズムによって一応、
濾過されたとはいへ。これは明治十年度の
文学概念から二十年代、三十年代に
しばしば出てくるを得るから

文学のなりそこね、残滓が残った

誤れる概念のもとに 作家は
曲りなりにも 藝術をりえんのほ
ろか

日本の自然主義作家は、ヨーロッパの
リアリズムから 技術をそとして
倫理までも 学び得、ある程度
までは 日本流に消化し得る

つまり 技術も倫理も 翻訳可能で
あったか、 翻訳の不可能なものか
あつて、それをつまひ 思ひかしたのが
その 美であつた

十九世紀ヨーロッパのリアリズムとは、

「実證精神」とそれによつて

「完膚なきまでに 剔抹せられた

人間の現象」といふみじかい

両者の対抗してゐる 美を

エロセんとした 六躬余の一葉を
るから

←

時代が移る得る それ自身の
様式といふもの

←

藝術とは 様式を 確立せんとする
にのみあり、 時代や民族の
精神的 真実は 様式の美に
よつて 證されよう

作家は文学概念によつては
なく、 作家の氣質によつて
作品を書いてゐる

←

日本の傳統的文学概念に
よつて 藝術をり得るから

人生いかんせんかゝの倫理的
ものがあるといふやうな
主観の不安定性と眞實に
まで 走着させ得る 様式を
確立せるといふことまでは
できなかつた

←

つまり、眞實は美とほして
證されるといふ 原理 以前の
と眞實が、美かの二者択一を
つてつけられてゐるから

←

近代ヨーロッパと封建日本との
落差のほげしから、 理念と
現象との差のほげしから、
その 調和による 様式の美の
確立を不可能にしたから

現代の日本の文藝はなんの樣式
をも獲得してゐない

時代の樣式の美を模倣せんとする
正しい藝術の意圖を捨てずしては
ほくえう自身と眞實さを失ふ
得ない

現代の文藝概念の美の概念の
欠如してゐるが、ほくえうの
習慣のせいである



ほくえうのうらみある「美の傳統的
解決」は美を保證せられずして
人間の眞實さを失はしうるといふ
偏狹な精神主義を改めて
かかることこそが務めである

〈感想〉

戦後の文壇とその取り巻き達への啓蒙活動に相当の
エネルギーを費してゐた状況がうかがへて興味深かった。
樣式美の確立と藝術家の仕事との關係について
作家の態度の「永井荷風」の文章がとても参考に
なつたが、今ひとつピントこないのは、私自身の
樣式美と無縁の生活環境におかれてゐるからである。
うか、恒に自身は、東京下町出身で、まづ江戸の
文化や情緒が、残つてゐた中で生活したので、荷風の
言説は、他人事ではなかつた。強ひられ開國と
物質的な貪りから来る、近代日本の「精神主義」に
ついて戦後二十余年の今日の我々は、改めることか
あるか、考へ続けたい。